三重県埋蔵文化財調査報告241

田面遺跡発掘調査報告

～一志郡三雲町曽原所在～

２００３年３月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県一志郡三雲町は、伊勢平野の臍となる位置にあり、古来より交通の要衝ともいえる地域です。また、三雲町に所在する中ノ庄遺跡は、昭和46年に発掘調査されたことによって、三重県の弥生時代の広まりを確認した歴史的な発見といえるでしょう。伊勢の平野でのこの発見は、今後も輝き続けると思います。

今回、発掘調査を行いました田面遺跡は、ほぼ三雲町の真中に位置しており古来より生活環境は非常に良かったのかもしれません。周辺においても多くの遺跡があり、発掘調査が行われており、これらの遺跡と有機的な繋がりを持っていたであろうと思われます。

我々、埋蔵文化財保護に携わるものは、祖先が残してくれた貴重な文化財を県民の資産として守っていかねばなりません。しかし、今回のように遺跡が破壊されてしまうことで発掘調査を行いましたが、出来うる限りこの財産を残していきたいと考えています。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご協力を受けました三雲町曽原の地元各位をはじめとして、三雲町教育委員会・三重県農林水産商工部・津地方県民局などの関係者各位に厚く感謝申し上げます。

平成15年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1　本書は、三重県一志郡三雲町曽原に所在する田面（たもて）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査体制は下記の体制で行った。

・調査主体　　三重県教育委員会

・調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査第一課　技　師　萩原義彦

研修員　山﨑博史

・発掘作業受託　（株）安西工業

3　本書の作成は、上記担当者の他調査第一課が行った。遺構・遺物の写真撮影は萩原が行い、執筆及び全体の編集は山﨑・萩原が行った。

4　本書作成にあたっては、伊藤裕偉・水橋公恵（斎宮歴史博物館）及び村田匡氏（三雲町教育委員会）から有益な御助言・教示を頂いた。

5　本書で示す方位は、国土調査法第Ⅵ座標系を基準とし、座標北を用いた。真北は、座標北のＮ０°20′Ｗ、磁北のＮ６°40′Ｗである。

6　本文で示す遺構表示略記号は、下記の通りである。

SA：柱列・柵　　SD：溝　　SK：土坑　　Ｐ：柱穴

7　本書で報告した記録及び出土遺物は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8　発掘調査は、三重県教育委員会が三重県農林水産商工部より執行委任を受けて、平成13年度広域農道整備事業（中勢３期地区　三雲Ｉ区）に伴って実施した。

9　調査に当っては、三重県農林水産商工部農山漁村振興課・津地方県民局農林水産商工部・三雲町教育委員会及び地元各位から協力を得た。

本 文 目 次

Ⅰ　前言 …… 1
1　調査契機 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査経過 …… 1
4　調査方法 …… 2
5　文化財保護法等にかかる諸通知 …… 2
6　遺跡名称について …… 2
Ⅱ　位置と環境 …… 3
1　地理的環境 …… 3
2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　遺構 …… 6
1　基本的層位及び地形 …… 6
2　検出遺構 …… 6
Ⅳ　遺物 …… 13
1　弥生時代 …… 13
2　平安時代 …… 13
3　鎌倉・室町時代 …… 13
Ⅴ　まとめ …… 17
1　弥生時代について …… 17
2　中北勢系土師器羽釜について …… 17

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図 …… 3
第 2 図　調査区周辺地形図 …… 4
第 3 図　調査区位置図 …… 5
第 4 図　遺構平面図・調査区土層断面図 …… 7・8
第 5 図　SD 3 遺物出土状況図 …… 9
第 6 図　SK 7 平面・断面図 …… 9
第 7 図　SK43平面・断面図 …… 9
第 8 図　SK21・48平面・断面図 …… 9
第 9 図　SK135・136平面・断面図 …… 9
第10図　SA137平面・断面図 …… 10
第11図　出土遺物実測図(1) …… 13
第12図　出土遺物実測図(2) …… 14

表　目　次

第 1 表　遺構一覧表 …… 11
第 2 表　遺構一覧表 …… 12
第 3 表　出土遺物観察表 …… 16

写真図版目次

PL 1　調査区完掘状況（西から）
調査区完掘状況（東から）
SD 3 遺物出土状況
PL 2　調査区完掘状況（北から）
調査区完掘状況（西から）
PL 3　出土遺物
PL 4　出土遺物

Ⅰ　前　　言

1　調査契機

今回の発掘調査対象地は、南北方向に走る国道23号線と県道とを東西方向に結ぶ道路部分である。この広域農道整備事業は、嬉野町役場から三雲町役場にかけてほぼ東西に横断するルートの整備事業である。このルートの整備によって嬉野町から国道23号線にかけては、非常に便利なものとなる。そのため、平成９年度から田面遺跡・山越遺跡・曽原堀之内遺跡・大西代遺跡にかけて試掘調査を行っている。その中で曽原堀之内遺跡[①]において発掘調査が行われ、遺構では溝やピットが検出され、遺物では土師器鍋・皿・土錘等が出土している。これらの続きとして三雲町の国道23号線と県道部分との間において平成12年度に2,000㎡を対象に試掘調査を行った。その結果、溝等が確認されたため1,000㎡において本調査を行うことになった。また、調査途中において遺構が調査対象範囲外に広がることが判明したため最終的な調査面積は、1,250㎡である。

2　調査体制

発掘調査は、平成13年８月20日から重機によって表土掘削を行う予定であったが台風11号が接近したため延期することとなった。表土掘削は、８月23日から開始した。表土掘削終了したのちに27日から作業員による人力掘削作業を行った。なお、発掘作業を安西工業に委託した。同年10月12日に現地における作業を終了し、10月15日に撤収後、現地引渡し。

調査には、地元を含めた多数の作業員の参加を得ることができ調査も速やかに終えることができた。

また、調査が無事終了することができたのは、作業に従事していただいた方々の協力のおかげである。ここにご芳名を記して感謝したい。（敬称略）

赤塚宏、鈴木和夫、小河義廣、川喜田良次、
北田英司、小田清子、天野清美、鬼丸君代、
加藤紗規子、加藤秀子、池川弘子、玉井操子、
古山弘子、川野はつ代、服部浩、平田四郎、
小堂彰、松井一郎、中野和雄、佐伯久隆

3　調査経過

＜調査日誌から＞

平成13年７月30日㈪　津地方県民局農業基盤整備２Ｇ（高嶋・中森）と現地協議、及び安西工業と現地打ち合わせ。

８月20日㈪　重機掘削の予定であったが台風11号接近のため安西工業と打ち合わせの上、延期。

８月23日㈭　重機による表土掘削。西側道路部分との境界にフェンス設置。

８月24日㈮　引き続き表土掘削。地区設定。作業員投入前のベルコン等の資材搬入。

８月27日㈪　作業員投入。調査区が低地のため側溝を掘削及び包含層掘削。できる範囲から遺構カード作成。

８月28日㈫　包含層掘削及び略図作成。

８月29日㈬　遺構検出後、遺構の掘削に取りかかる。

８月30日㈭　遺構掘削。遺物出土、土師器甕、出土状況図及び写真撮影。溝断面実測。

８月31日㈮　調査第一課会議のため作業中止。

９月３日㈪　雨のため作業中止。

９月４日㈫　水抜き作業。遺構掘削及び遺構清掃に着手。ほぼ遺構掘削終了。

９月５日㈬　写真撮影及び割り付け及び重機による東側表土除去。東側では、包含層非常に薄い。

９月６日㈭　遺構平面図実測及び表土掘削。

９月７日㈮　実測及び地区設定。午後からセンターに戻る。

９月10日㈪　台風15号接近、大雨のため作業中止。センターに退避。

９月11日㈫　調査区水没、プール状態、水抜き。

９月12日㈬　作業員再投入、側溝掘削。

９月13日㈭　遺構検出及び掘削。略図作成。調査区土層断面図作成。

９月14日㈮　雨のため作業中止。水抜き。

９月17日㈪　水抜き後、遺構清掃に取りかかる。終了後写真撮影。

9月18日㈫　写真撮影及び割り付け。平成12年度において試掘により遺構なしと判断した箇所についても遺構が広がることが判明したので、津地方県民局担当者高嶋及び当センター第一係長筒井と協議し、拡張することを了解する。
9月19・20日（水・木）　実測及びレベル入れ。
9月21日㈮　断ち割り作業、個別断面図作成。
9月25日㈫　断ち割り作業、個別図作成。重機による掘削土の調査区埋め戻し。
9月26日㈬　埋め戻し。
9月27日㈭　拡張予定部分の表土掘削。
9月28日㈮　表土除去及び地区設定。調査第一課会議。
10月1日㈪　雨のため作業中止。水抜き。
10月2日㈫　作業員再投入。包含層掘削。略図作成。
10月3日㈬　包含層掘削、遺構検出終了後、遺構掘削に取りかかる。
10月4日㈭　遺構掘削、しかし午後から雨のため作業中止。
10月5日㈮　遺構掘削終了、写真撮影のための清掃に取りかかる。
10月9日㈫　遺構清掃及び写真撮影。割り付け。調査区断面図作成。
10月10日㈬　雨のため作業中止。水抜き。
10月11日㈭　排水作業及び実測。実測終了。
10月12日㈮　断割り及び実測。
10月15日㈪　片付け及び資材搬出。

4　調査方法

調査における地区割りは、4m×4mのグリッドを設定し、東西方向をアルファベット（西から東にかけてA・B・C・―）、南北方向を数字（1・2・3・―）で表示した。包含層面まで重機による掘削を行い、包含層・遺構掘削を人力で行った。また、3m×3mのメッシュを組み遺構平面図と調査区土層断面図の実測は、1／20で行った。個別の遺物出土状況図や遺構断割図の実測図は、1／10で行った。なお、3mメッシュ及び4mメッシュは、任意の東西・南北方向で割り付けを行い、基準点（座標）を後から付した。

また、遺構番号は全て通し番号で1から付け、地区名は、4mメッシュの北西隅に所在するグリッド名を付して遺物の取り上げを行った。

5　文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により行っている。

法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）
平成13年4月26日付津農第8－2号
法第58条の2第1項（県教育長宛）
平成13年8月21日付教埋第155号（県教育長宛）
遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長宛）
平成14年2月4日付教生ス第8－10号（スポーツ・生涯学習課長通知）

6　遺跡名称について

今回の調査地の遺跡名称は、平成9年度において田面遺跡として登録されていたものの、平成12年度において仮称である。対象地周辺には、北側に松本権現前遺跡、西から南側に中林中道遺跡・東側に曽原遺跡・曽原城跡といった遺跡に囲まれているものの空白地帯であり、調査結果によってはどれかの遺跡範囲として考えるべきであろう。

［註］
①清水正明ほか『北条畑田遺跡・安知本上田遺跡・曽原堀之内遺跡・花之木遺跡』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）

Ⅱ　位置と環境

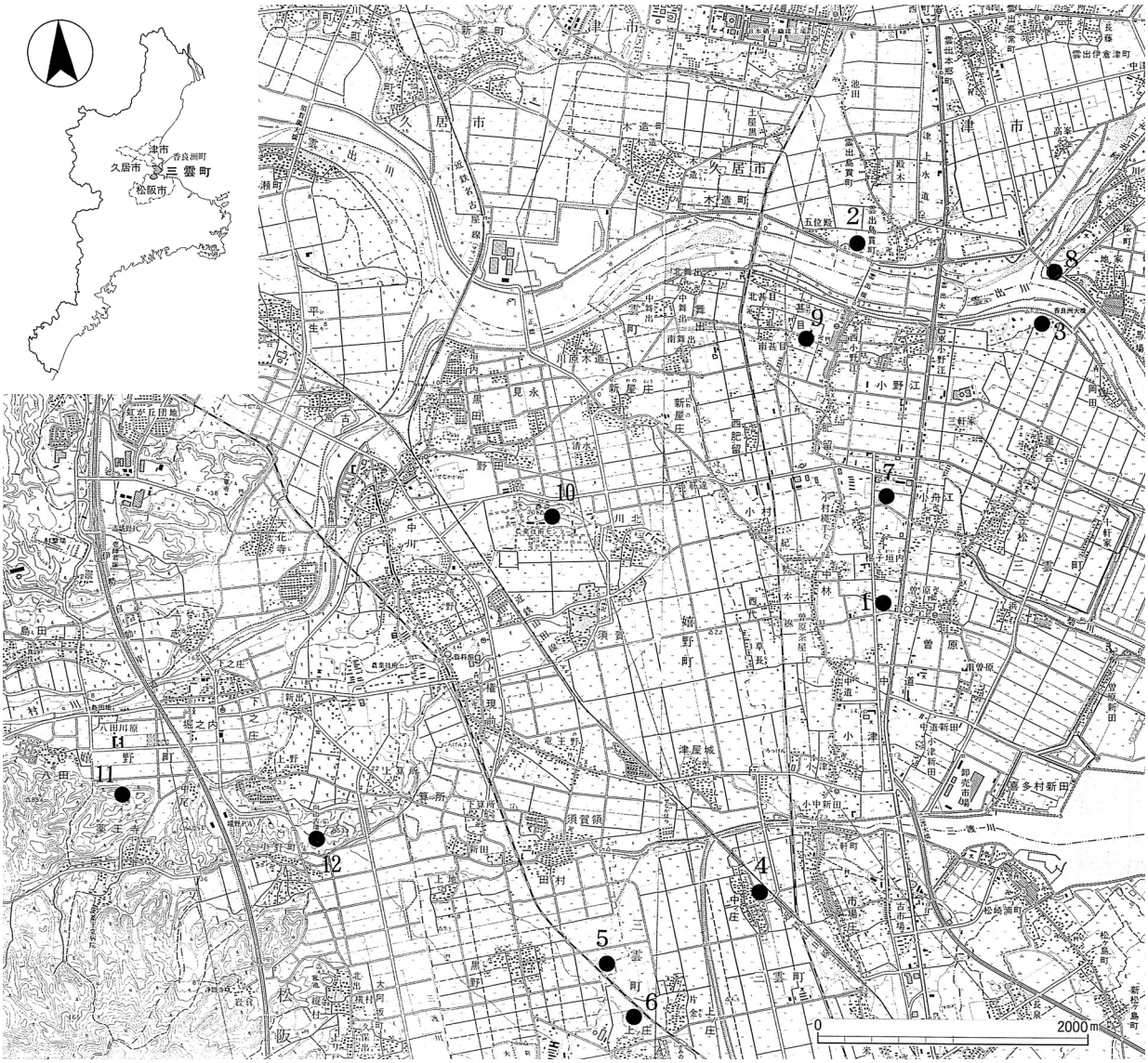
1　地理的環境

発掘調査地である田面遺跡（1）は、三重県一志郡三雲町字曽原に所在する。三雲町は、ほぼ伊勢平野の中央部に位置し、一志郡の中では東部にある。行政区分上においては、北側は、三重・奈良県境の高見山地を源とする雲出川を境にして津市と香良洲町に接している。南側は、一部を三渡川右岸に及ぶものの松阪市に接し、西側は嬉野町である。また、東側は伊勢湾であり、三雲町は河川によって形成された沖積平野に所在する。当調査地は、ほぼ三雲町の中央に位置している。調査区周辺の標高は0～1m前後であり、調査地の現況は休耕田である。

2　歴史的環境

田面遺跡の周辺の遺跡について見ていきたい。縄文時代晩期頃から集落形成されていたとみられる。なかでも雲出川下流域に所在する雲出島貫遺跡（2）では、突帯文土器が出土し、土器棺が検出されている。また、前田町屋遺跡（3）においても、突帯文土器が出土しており、発掘調査に伴って類例は増加するであろう。

弥生時代にはいっては、南西方向へ約2㎞の三渡



第1図　遺跡位置図（1／50,000）『この地図は国土地理院発行の「大仰」「松阪港」（1/25,000）を掲載したものである。』

川右岸に有名な中ノ庄遺跡（4）が存在する。この遺跡からは、前期の遺構・遺物が確認されており周辺域のなかで最も古いとみられ、中ノ庄遺跡がはたした役割はかなり大きいとみられる。また、上ノ庄に所在する宮ノ腰遺跡（5）においても前期土器が出土している。両遺跡とも、平野の微高地に集落が所在し縄文時代晩期から低地部へ移行が窺える。中期には、雲出島貫遺跡で竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、中期には、より一層、生活圏の拡大状況が窺える。

古墳時代においては、雲出島貫遺跡において竪穴住居や墳墓等が検出されており集落域・墓域が存在していたとみられる。また、宮ノ腰遺跡・上ノ庄北出遺跡（6）・松本権現前遺跡（7）・香良洲西山遺跡（8）においても集落が存在した可能性がある。前田町屋遺跡では、初頭頃の墳墓とみられる遺構が4基確認されている。全て方形ないし前方後方形とみられ、遺物では二重口縁壺などが出土している。中期では、中ノ庄遺跡において形象埴輪・円筒埴輪が多く出土し、5世紀後葉とみられる。また、小野江甚目古墳群（9）からも形象・円筒埴輪が出土しており5世紀末～6世紀前葉とみられる。こうした低地部での古墳の存在は、西側に隣接する嬉野町の西山古墳（10）・錆山古墳（11）・向山古墳（12）などの前方後方墳が存在していることで大きな意味をもつと考えられる。

また、大きく古墳時代に入ってから遺跡数は、増大している。しかし、弥生時代後期は少なくかなりの違いがある。

奈良～平安時代では、この地域は一志郡に属しており、一志駅及び一志頓宮の所在地域であるが一志駅については、三雲町曽原をはじめとして諸説があ

第2図　調査区周辺地形図（1／5,000）

り現状では、不確定である。雲出島貫遺跡では、7世紀後半頃とみられる大型掘立柱建物が検出され、一志郡家との係わりが指摘されている。前田町屋遺跡でも同様に掘立柱建物が確認されている。この周辺域では、緑釉陶器・灰釉陶器・暗文土師器が表採されており、かなり官衙関連の遺跡があることは、疑いの余地はないであろう。

鎌倉・室町時代では、神宮の御厨・御薗が所在し、とりわけ三雲町曽原は、神宮領から摂関家領となった蘇原御厨（蘇原庄）とみられる。また、発掘調査によって雲出島貫遺跡から10～11世紀頃の館跡とみられる大規模な堀を有し、多くの京都系土師器や陶磁器が出土し、かなりの大規模な集落跡が確認されている。さらに、13～14世紀にかけて集落跡とみられる遺構が宮ノ腰遺跡で確認されている。松本権現前遺跡や香良洲西山遺跡においても集落跡とみられる遺構が検出されている。　（山﨑博史）

［註］

①伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜第1次調査』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）
伊藤裕偉『嶋抜Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）
伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター　2001年）

②日栄智子『前田町屋遺跡（第１次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1997年）
新名強『前田町屋（第２次調査）・星合大名神』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

③谷本鋭二『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会　1972年）

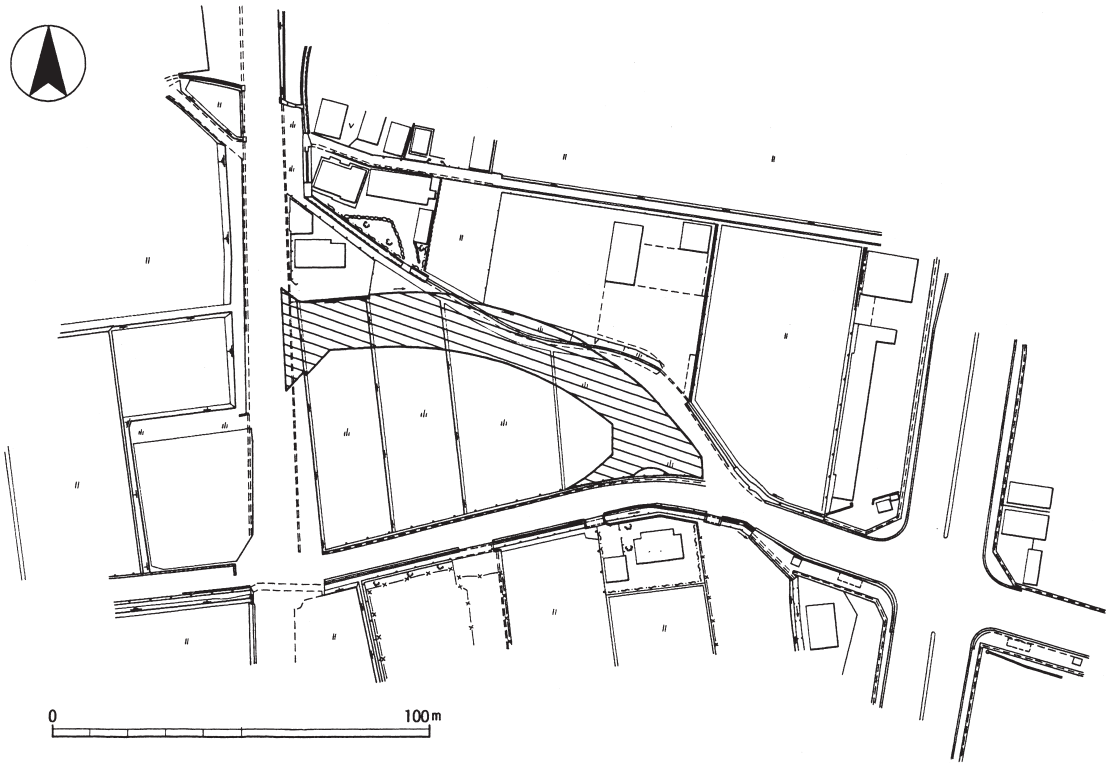
④伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』（三重県埋蔵文化財センター　1996年）
水谷豊『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

⑤山本義浩『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）

⑥村田匡『松本権現前遺跡発掘調査報告』（三雲町教育委員会　1999年）
村田匡『松本権現前遺跡第2次発掘調査報告』（三雲町教育委員会 2002年）

⑦齋藤直樹ほか『香良洲西山遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）

⑧大川勝宏『小野江甚目遺跡・小野江甚目古墳群発掘調査報告書』（三重県埋蔵文化財センター　1999年）



第３図　調査区位置図（１／2,000）

Ⅲ　遺　　構

1　基本的層位及び地形

今回の調査地は、標高０～１ｍ前後の低地である。調査区は、国道23号線と県道に挟まれ、この両車線を繋ぐ農道部分である。調査区内の標高は、東側に所在する三雲町役場にかけてやや低くなる。

基本的な層序は、ほぼ第１層が表土、第２層が褐灰色粘土層、第３層が黄橙色粘質土・明黄褐色粘質土である。調査区内においても西側から東側にかけてかなり緩やかに傾斜している。第２層は、包含層であり時期が広範囲の遺物を含む。また、東側では包含層が無く、表土直下において第３層を確認できる箇所もあった。さらに、重機による掘削は、第２層までとし、第２層は、人力による掘削を行った。遺構検出は、第３層上において行い、弥生時代を含む鎌倉・室町時代にかけての遺構を検出した。

2　検出遺構

検出した遺構なかでも主なものについては、記述し、他のものについては表（第１表　遺構一覧表）に詳細なデータを記載した。

１）弥生時代

Ｐ13　調査区のほぼ西側において検出したピットである。ピットの検出規模は、長径0.37ｍ、短径0.29ｍ、深さ0.2ｍである。この遺構と同時期と判断できる遺構は、調査区内において確認できない。遺物は、弥生土器の甕の口縁部から体部にかけての一部が出土している。

２）鎌倉・室町時代

SK７　調査区西側において検出した土坑である。土坑としたものの井戸の可能性は高い。規模は、直径約1.25ｍ、深さ約0.9ｍである。出土遺物には、土師器小皿がある。

SK21　調査区中央部において検出した土坑である。SK48にほぼ隣接している。井戸の可能性は高い。土坑の規模は、直径約１ｍ、深さ約0.65ｍである。出土遺物には、陶器椀がある。

SK43　調査区中央部において検出した土坑である。土坑としたものの井戸の可能性は高い。規模は、直径約1.05ｍ、深さ約0.7ｍである。

SK48　調査区中央部において検出した土坑である。土坑としたものの井戸の可能性は高い。規模は、直径約0.7ｍ、深さ約0.75ｍである。

SK135　調査区東側の拡張部分の中央において検出した土坑である。土坑としたものの井戸の可能性は高い。規模は、直径約１ｍ、深さ約1.15ｍである。

SK136　調査区東側の拡張部分のやや北側において検出した土坑である。土坑としたものの井戸の可能性は高い。規模は、直径約0.8ｍ、深さ約0.6ｍである。

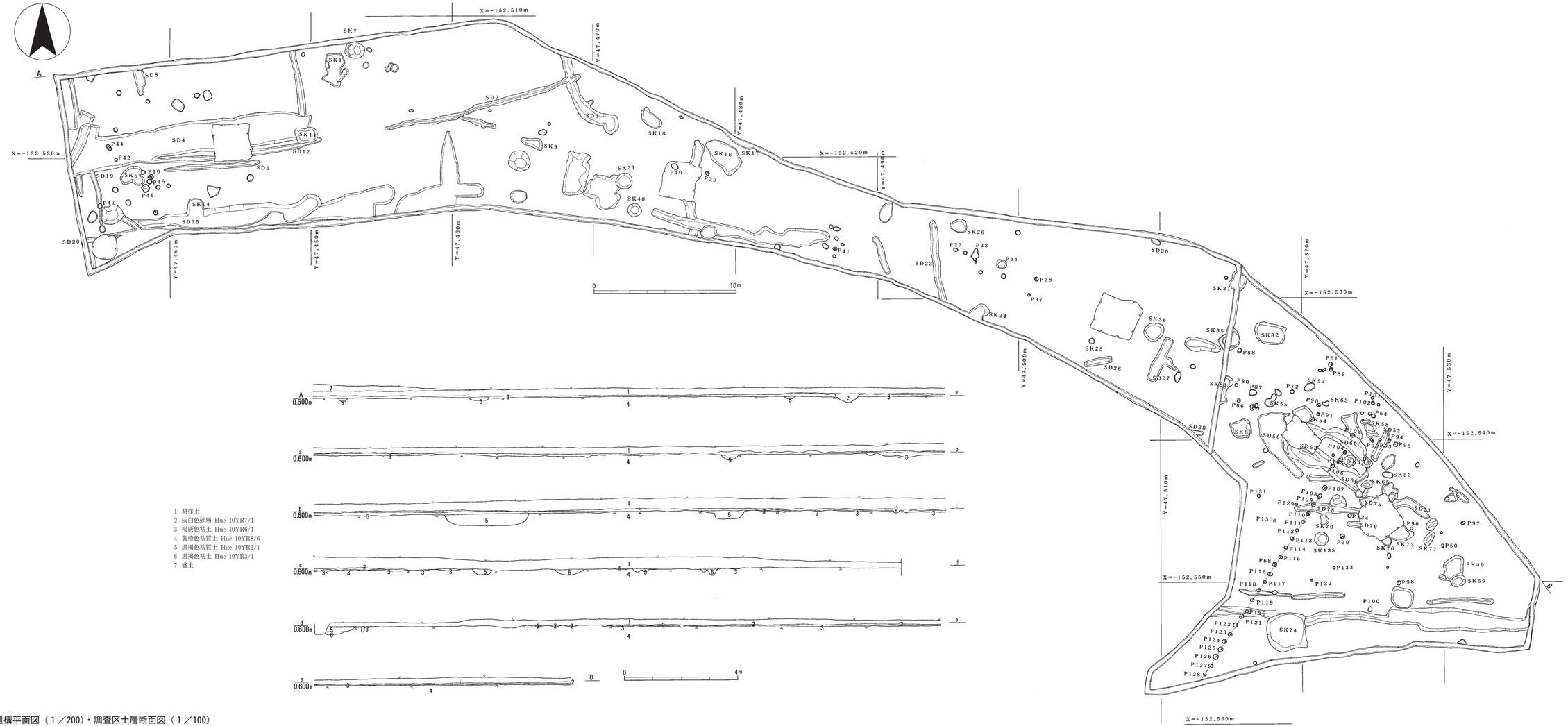
SD３　調査区中央部において検出した弧状の溝である。検出した溝は、幅0.6～１ｍ前後、深さ0.2ｍ前後である。調査区内で北から東にかけて緩やかに屈曲するものである。ほぼ東端において土師器鍋が出土している。他に陶器椀が出土している。

SD４　調査区西側において検出した東西方向の溝である。検出した溝は、幅約２ｍ前後、深さ約0.1ｍ前後である。この溝からは、中北勢系土師器鍋が出土している。共伴遺物がないことが惜しまれる。

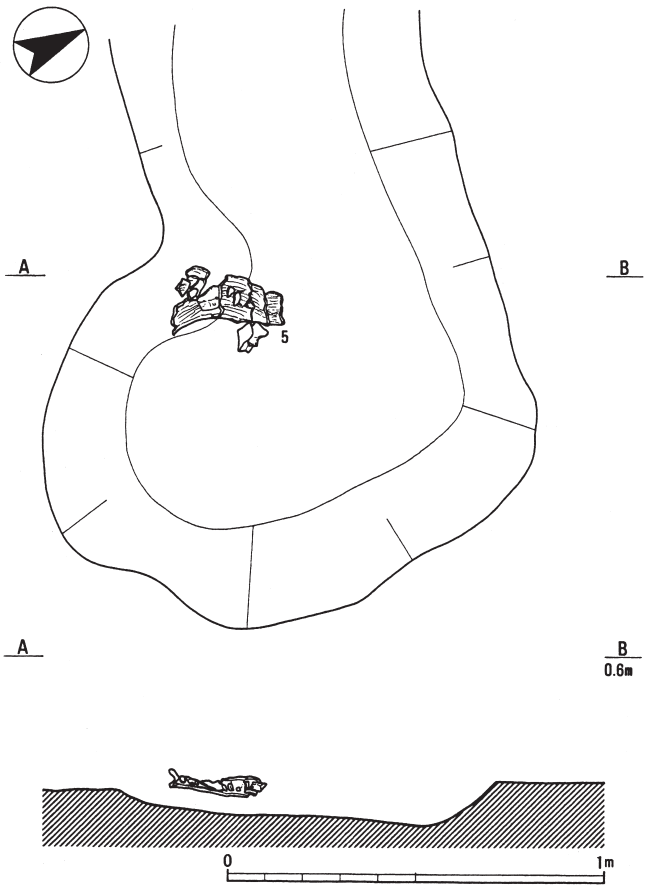
３）時期不明

SA137　調査区のほぼ東側において検出したほぼ南北方向の塀もしくは柵（以下、柵と表記する）である。検出した柵は25間分で、柱間寸法はおおよそ２尺等間であろう。方位は、N33°Ｅである。柱穴は、だいたいが直径0.3ｍ前後、深さ0.3ｍ前後である。一部柱痕跡を残している。遺物は、一部の柱穴から陶器椀（山茶椀）が出土している。しかし、出土状況や柱穴の埋土の土質及び土色は、鎌倉・室町時代にかけての遺構のものと比較してやや異なる。よってここでは、中世として考えず中世以降であろうと推測する。

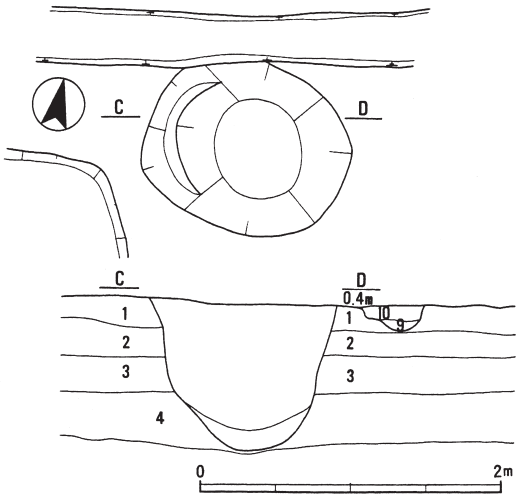
SK74　調査区東側の拡張部分において検出した土坑である。規模は、一辺約2.6ｍ前後、深さ0.6ｍ前後の方形である。出土遺物は、全くなく時期不明である。　（萩原義彦）



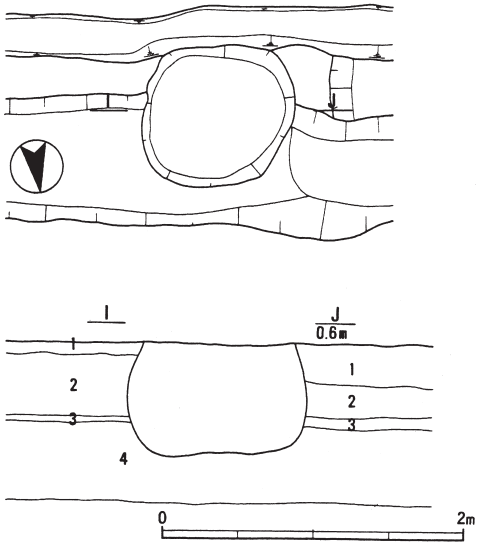
第４図　遺構平面図（１／200）・調査区土層断面図（１／100）



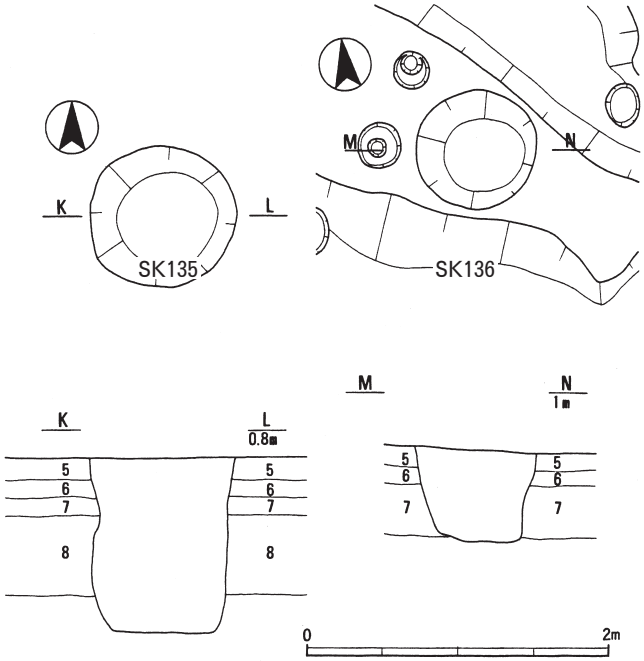
第５図　SD3遺物出土状況図（１／20）



第６図　SK7平面・断面図（１／50）

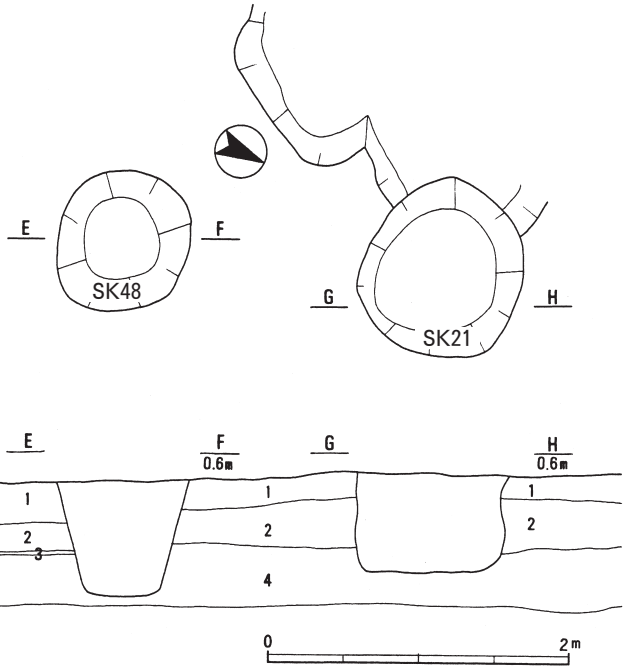


第７図　SK43平面・断面図（１／50）

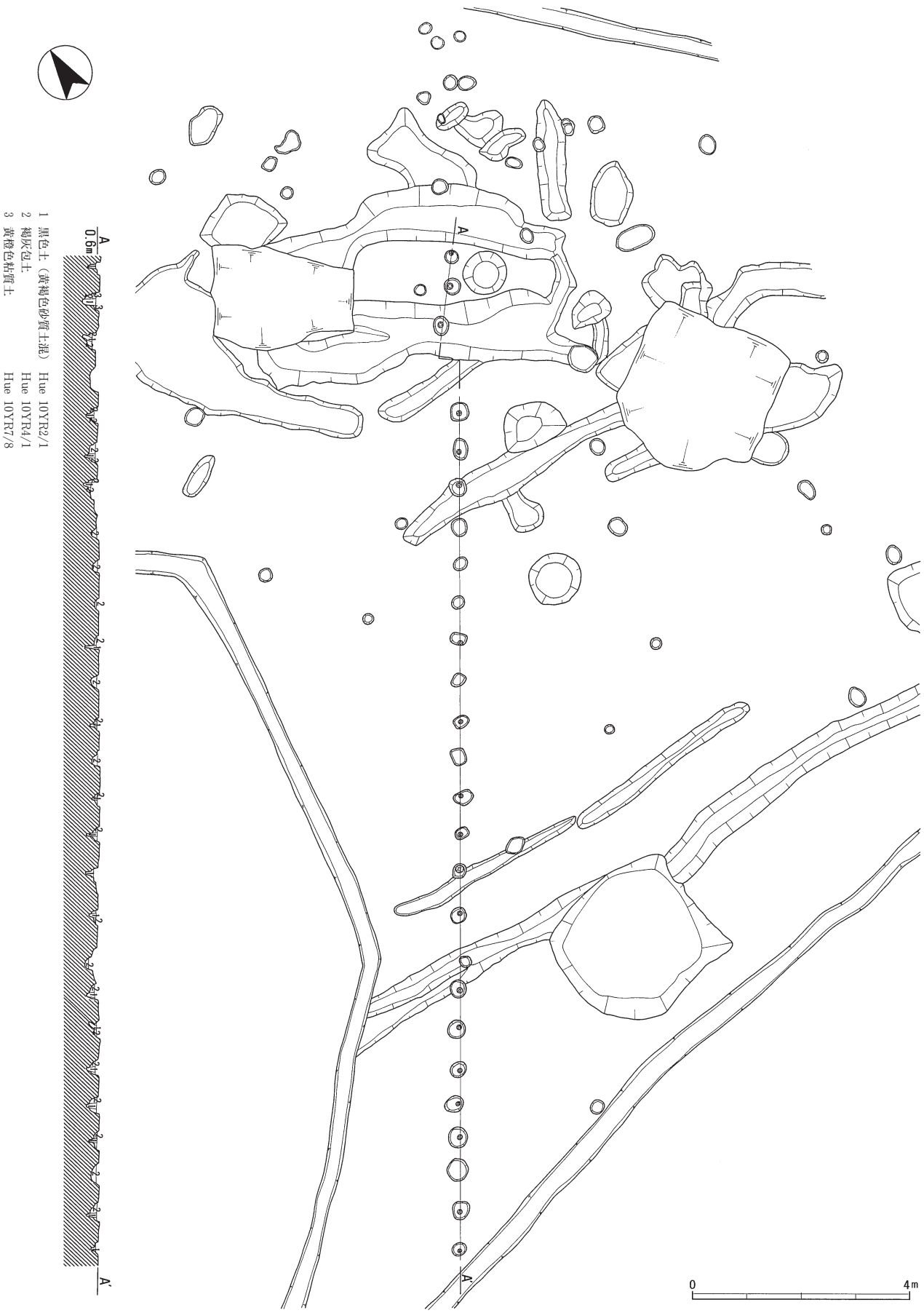


第９図　SK135・136平面・断面図（１／50）

1　オリーブ色粘土 Hue 5Y6/8
2　灰色砂層 Hue 5Y4/1
3　暗オリーブ色砂層 Hue 5Y4/4
4　黒色砂層 Hue 5Y2/1
5　明黄褐色粘質土 Hue 2.5Y6/6
6　暗灰黄色砂質土 Hue 2.5Y5/2
7　灰オリーブ色砂層 Hue 7.5Y5/3
8　青黒色砂層 Hue 10BG1.7/1
9　黒色粘土 Hue 10Y2/1
10　オリーブ黒色土 Hue 5Y3/2



第８図　SK21・48平面・断面図（１／50）



第10図　SA137平面・断面図（１／100）

遺構番号	遺構名	地区名	形　状	検　　出　　規　　模	時 期	備　　考
SK 1	土坑	C 5	不整形	長径2.36m・短径1.38m・深さ0.18m	中世	土師器皿片
SD 2	溝	B 9	－	幅0.42m・深さ0.07m	中世	土師器皿片
SD 3	溝	B 10	－	幅0.6～0.94m・深さ0.26m	中世	山茶椀
SD 4	溝	D 4	－	幅2.02m・深さ0.1m	中世？	
SK 5	土坑	E 2	楕円形	長径1.64m・短径0.96m・深さ0.16m	中世	土師器片・他の遺構と重複
SD 6	溝	E 3	－	幅約0.36m・深さ0.05m	中世？	
SK 7	土坑	B 5	楕円形	長径1.36m・短径約1.13m・深さ0.98m	中世	土師器皿片
SD 8	溝	C 2	－	幅0.44～0.68m・深さ0.09m	中世	
SK 9	土坑	C 9	不整円形	長径1.54m・短径0.46～0.78m・深さ0.11m	中世	土師器皿片
P 10	柱穴	E 2	不整円形	長径0.39m・短径0.3m・深さ0.37m	中世？	
SK11	土坑	D 5	隅丸方形	長辺1.5m、短辺1.1m・深さ0.46m	中世	土師器片
SD12	溝	D 3	－	幅0.4m・深さ0.1m	中世？	土師器片
P 13	柱穴	E 3	不整円形	長径0.37m・短径0.29m・深さ0.21m	弥生	弥生土器
SK14	土坑	E 3	隅丸方形	長径1.16m・短径0.94m・深さ0.06m	中世	土師器片・他の遺構と重複
SD15	溝	E 3	－	幅0.54m・深さ0.12m	中世？	土師器片
SK16	土坑	C 12	不整形	長径2.84m・短径1.62m・深さ0.19m	中世	土師器片
SK17	土坑	C 12	不整形	長径２m・短径0.22m・深さ0.24m	中世	山茶椀
SK18	土坑	B 11	不整形	長径1.86m・短径0.85m・深さ0.17m	中世	土師器片
SD19	溝	E 1	－	幅0.29m・深さ0.1m	中世	土師器片
SD20	溝	F 2	－	幅0.34m・深さ0.05m	中世？	
SK21	土坑	D 11	－	直径1.14m・深さ0.65m	中世？	
SD22	溝	D 11	－	幅0.86m・深さ0.11m	中世？	
SD23	溝	D 16	－	幅0.5m・深さ0.05～0.08m	中世？	
SK24	土坑	E 17	楕円形	長径0.96m・短径0.7m・深さ0.2m	中世？	他の遺構の重複
P 25	柱穴	E 19	円形	径0.38m・深さ0.17m	中世？	
SD26	溝	E 19	－	幅0.48m・深さ0.08m	中世？	
SD27	溝	E 20	－	幅0.81m・深さ0.15m	中世？	
SD28	溝	F 21	－	幅0.32m・深さ0.04m	中世？	
SK29	土坑	D 17	卵形	長径1.2m・短径0.9m・深さ0.37m	中世？	
SK30	土坑	C 20	楕円形	長径0.62m・短径0.38m・深さ0.06m	中世？	
SK31	土坑	D 21	楕円形	長径1.35m・短径1.14m・深さ0.2m	中世？	
P 32	柱穴	D 17	円形	長径0.32m・短径0.25m・深さ0.05m	中世？	
P 33	柱穴	D 17	不整三角形	長径0.7m・短径0.55m・深さ0.06m	中世？	柱穴の重複とみられる
P 34	柱穴	D 17	楕円形	長径0.69m・短径0.54m・深さ0.13m	中世？	柱穴の重複とみられる
SK35	土坑	E 21	隅丸方形	長径1.44m・短径1.15m・深さ0.27m	中世？	
SK36	土坑	E 20	円形	長径1.43m・短径1.28m・深さ0.26m	中世？	
P 37	柱穴	D 18	円形	径0.21m・深さ0.18m	中世？	
P 38	柱穴	D 18	円形	径0.29m・深さ0.14m	中世？	
P 39	柱穴	D 12	円形	長径0.3m・短径0.26m・深さ0.16m	中世？	
P 40	柱穴	C 12	楕円形	長径0.52m・短径0.38m・深さ0.43m	中世？	
P 41	柱穴	D 15	楕円形	長径0.31m・短径0.22m・深さ0.16m	中世？	
P 42	柱穴	D 2	円形	径0.24m・深さ0.22m	中世？	
SK43	土坑	D 12	不整円形	長径0.92～１m・深さ0.72m	中世？	
P 44	柱穴	D 2	楕円形	長径0.47m・短径0.29m・深さ0.52m	中世？	
P 45	柱穴	E 2	隅丸方形	長径0.34m・短径0.29m・深さ0.32m	中世？	
P 46	柱穴	E 2	隅丸方形	径0.5m・深さ0.23m	中世？	
P 47	柱穴	F 2	楕円形	長径0.32m、短径0.3m・深さ0.33m	中世？	
SK48	土坑	D 11	不整円形	径0.92～0.98m・深さ0.76m	中世？	
SK49	土坑	H 26	不整形	長径1.58m・短径1.25m・深さ0.29m	中世？	
P 50	柱穴	H 26	長楕円形	長径0.31m・短径0.18m・深さ0.11m	中世？	
SD51	溝	G 25	－	幅0.6m・深さ0.04m	中世？	
SD52	溝	F 24	－	幅0.52m・深さ0.06m	中世？	
SK53	土坑	G 25	長楕円形	長径0.75m・短径0.4m・深さ0.03m	中世？	
SK54	土坑	F 23	隅丸方形	長径1.16m・短径1.14m・深さ0.04m	中世？	
P 55	柱穴	F 22	円形	長径0.69m・短径0.58m・深さ0.06m	中世？	柱穴の重複
SD56	溝	F 23	－	幅0.59～0.7m・深さ0.08m	中世？	
SK57	土坑	E 23	不整形	長径0.8m・短径0.5m・深さ0.05m	中世？	
SK58	土坑	F 24	不整形	長径0.8m・短径0.72m・深さ0.05m	中世？	他の遺構と重複
SK59	土坑	H 26	楕円形	長径1.04m・短径0.77m・深さ0.31m	中世？	
SD60	溝	F 24	－	幅0.64～１m・深さ0.1m	中世？	SD62・66と繋がる
P 61	柱穴	E 23	不整形	長径0.34m、短径0.28m・深さ0.22m	中世？	
SD62	溝	F 23	－	幅0.94～1.2m・深さ0.04m	中世？	
SK63	土坑	F 23	不整形	長径約0.48m・短径0.38m・深さ0.02m	中世？	
P 64	柱穴	F 24	楕円形	長径0.34m・短径0.25m・深さ0.05m	中世？	
SK65	土坑	G 24	不整形	長径0.78m・短径0.58m・深さ0.04m	中世？	
SD66	溝	G 24	－	－	中世？	SD62と同遺構
SK67	溝	E 22	－	－	中世？	SK35と同遺構
P 68	柱穴	I 23	隅丸方形	長径0.32m・短径0.26m・深さ0.15m	不明	柵
SK69	土坑	D 22	－	－	中世？	SK31と同遺構
SK70	土坑	H 24	－	長径0.76m・短径0.62m・深さ0.06m	中世？	
SD71	溝	F 23	－	－	中世？	SD56と繋がる
P 72	柱穴	E 23	円形	長径0.29m・短径0.26m・深さ0.05m	中世？	
SK73	土坑	H 25	不整形	長径1.4m・短径0.98m・深さ0.14m	中世？	
SK74	土坑	J 23	隅丸方形	長径2.64m・短径2.56m・深さ0.8m	中世？	
SD75	溝	G 24	－	長径1.3m・短径0.58m・深さ0.06m	中世？	
SK76	土坑	H 25	楕円形	長径0.66m・短径0.58m・深さ0.06m	中世？	
SK77	土坑	H 25	長楕円形	長径1.04m・短径0.53m・深さ0.07m	中世？	
SD78	溝	G 24	－	幅0.4～0.7m・深さ0.05m	中世？	
SD79	溝	H 24	－	幅0.38m・深さ0.09m	中世？	
P 80	柱穴	F 22	楕円形	長径0.27m・短径0.23m・深さ0.05m	中世？	
SK81	土坑	F 22	不整形	長径2.1m・短径0.6m・深さ0.06m	中世？	
SK82	土坑	F 22	楕円形	長径2.15m・短径1.4m・深さ0.77m	中世？	
SK83	土坑	F 22	不整形	長径1.5m・短径1.4m・深さ0.05m	中世？	
P 84	柱穴	F 22	楕円形	長径0.3m・短径0.26m・深さ0.16m	中世？	

第１表　遺構一覧表

P85	柱穴	F22	楕円形	長径0.37m・短径0.26m・深さ0.12m	中世？	
P86	柱穴	F22	楕円形	径0.26m・深さ0.13m	中世？	
P87	柱穴	F22	隅丸方形	長径0.54m・短径0.44m・深さ0.27m	中世？	
P88	柱穴	E22	楕円形	長径0.36m・短径0.27m・深さ0.13m	中世？	
P89	柱穴	E23	楕円形	長径0.3m・短径0.22m・深さ0.14m	中世？	
P90	柱穴	F23	隅丸方形	長径0.28m・短径0.22m・深さ0.19m	中世？	
P91	柱穴	F23	円形	径0.23m・深さ0.24m	中世？	
P92	柱穴	F24	楕円形	長径0.32m・短径0.19m・深さ0.24m	中世？	
P93	柱穴	F24	楕円形	長径0.25m・短径0.2m・深さ0.3m	中世？	
P94	柱穴	F25	楕円形	長径0.3m・短径0.22m・深さ0.29m	中世？	
P95	柱穴	F25	円形	長径0.32m・短径0.28m・深さ0.17m	中世？	
P96	柱穴	G25	円形	径0.22m・深さ0.23m	中世？	
P97	柱穴	G26	円形	径0.18m・深さ0.2m	中世？	
P98	柱穴	H25	楕円形	長径0.35m・短径0.28m・深さ0.24m	中世？	
P99	柱穴	H24	楕円形	長径0.36m・短径0.31m・深さ0.3m	中世？	
P100	柱穴	I25	楕円形	長径0.4m・短径0.28m・深さ0.29m	中世？	
P101	柱穴	F24	楕円形	長径0.24m・短径0.2m・深さ0.17m	中世？	
P102	柱穴	F24	円形	径0.22m・深さ0.11m	中世？	
P103	柱穴	F24	円形	長径0.3m・短径0.28m・深さ0.29m	中世？	
P104	柱穴	F24	円形	径0.24m・深さ0.24m	不明	柵
P105	柱穴	F24	円形	径0.3m・深さ0.33m	不明	柵
P106	柱穴	G24	楕円形	長径0.34m・短径0.27m・深さ0.16m	不明	柵
P107	柱穴	G24	隅丸方形	長径0.32m・短径0.31m・深さ0.23m	不明	柵
P108	柱穴	G23	楕円形	長径0.4m・短径0.27m・深さ0.23m	不明	柵
P109	柱穴	G23	円形	長径0.34m・短径0.29m・深さ0.26m	不明	柵
P110	柱穴	H23	円形	長径0.32m・短径0.28m・深さ0.16m	不明	柵
P111	柱穴	H23	円形	長径0.26m・短径0.23m・深さ0.13m	不明	柵
P112	柱穴	H23	円形	長径0.24m・短径0.22m・深さ0.08m	不明	柵
P113	柱穴	H23	隅丸方形	長径0.3m・短径0.2m・深さ0.27m	不明	柵
P114	柱穴	H23	楕円形	長径約0.27m・短径0.22m・深さ0.15m	不明	柵
P115	柱穴	H23	楕円形	長径0.29m・短径0.22m・深さ0.17m	不明	柵
P116	柱穴	I23	楕円形	長径0.32m・短径0.22m・深さ0.15m	不明	柵
P117	柱穴	I23	楕円形	長径0.24m・短径0.2m・深さ0.25m	不明	柵
P118	柱穴	I23	楕円形	長径0.26m・短径0.24m・深さ0.24m	不明	柵
P119	柱穴	I23	円形	径0.28m・深さ0.18m	不明	柵
P120	柱穴	I22	楕円形	長径0.22m・短径0.18m・深さ0.14m	不明	柵
P121	柱穴	I22	楕円形	長径0.34m・短径0.26m・深さ0.23m	不明	柵
P122	柱穴	J22	円形	径0.32m・深さ0.2m	不明	柵
P123	柱穴	J22	楕円形	長径0.28m・短径0.26m・深さ0.14m	不明	柵
P124	柱穴	J22	楕円形	長径0.36m・短径0.28m・深さ0.23m	不明	柵
P125	柱穴	J22	円形	径0.36m・深さ0.21m	不明	柵
P126	柱穴	J22	円形	径0.35m・深さ0.15m	不明	柵
P127	柱穴	J22	楕円形	長径0.32m・短径0.3m・深さ0.25m	不明	柵
P128	柱穴	K22	円形	径0.25m・深さ0.14m	不明	柵
P129	柱穴	G23	円形	長径0.23m・短径0.2m・深さ0.25m	中世？	
P130	柱穴	H23	円形	径0.2m・深さ0.26m	中世？	
P131	柱穴	G22	円形	径0.24m・深さ0.13m	中世？	
P132	柱穴	I24	円形	径0.2m・深さ0.29m	中世？	
P133	柱穴	H24	円形	径0.18m・深さ0.36m	中世？	
P134	柱穴	G24	円形	長径0.32m・短径0.26m・深さ0.13m	中世？	
SK135	土坑	H24	円形	径0.96m・深さ1.3m	中世？	
SK136	土坑	F24	円形	径0.8m・深さ0.66m	中世？	
SA137	柵				不明	

第2表　遺構一覧表

［遺構一覧表註］

遺構番号：遺物の出土の如何に問わず全ての遺構に番号を1から順に付した。

遺 構 名：遺構検出時において平面形を観察することで土坑・柱穴・溝の性格を判断した。
なかには、土坑としながらも井戸の可能性を含むものもある。

地 区 名：他の地区にわたるものを含め代表的な地区杭を任意で記載した。よってその地区だけというわけでない。

形　　状：それぞれ遺構検出時の平面形によって判断した。

検出規模：検出した規模をしるした。単位は、全てメートルによるがミリ以下の単位は、原則的に四捨五入である。

時　　期：遺構の時期を判断できうるかぎりしるした。

備　　考：出土遺物・重複関係といった事柄について必要なかぎり記載した。

Ⅳ　遺　　物

調査によって出土した遺物は、調査区の面積に比して以外に少ない。遺物の時期は、弥生時代中期のものを若干含め鎌倉から室町時代にかけてのものが主である。しかしながら、少ない遺物のなかでも注目に値する成果をあげることもできた。遺物の時期はおおよそ12世紀後葉から13世紀前葉にかけてのものが主をしめており、10世紀後葉及び15世紀後葉から16世紀前葉のものを一部含む。遺物の個々の詳細については、遺物観察表（第２表　遺物観察表）を確認されたい。

1　弥生時代

1）Ｐ13出土遺物（１）

１は、甕の口縁部である。口縁端部は上下に肥厚し、キザミを施される。内面はやや粗いハケによって横方向に調整される。外面頸部においては縦方向にハケによる調整である。遺物の時期は中期中葉とみられる。

2）包含層出土遺物（２）

２は壺底部とみられる。底部内面は簾状ハケである。中期頃のものであろう。

2　平安時代

1）包含層出土遺物（３・４）

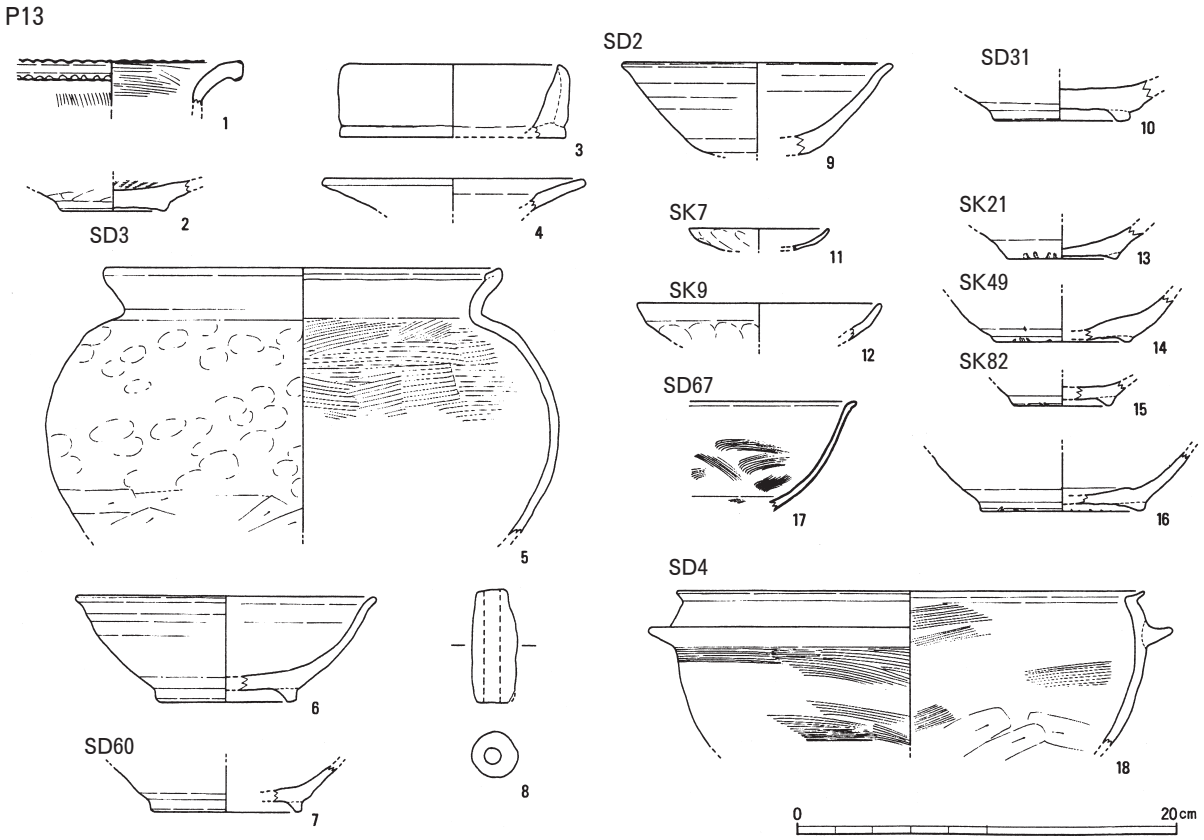
３は製塩土器である。かなりの被熱を受けて赤褐色に変化している。口径は、不確定であるが10～11cm前後である。山本雅靖氏の分類では、ＢⅢ類であろう。10世紀後葉とみられる。

４は灰釉陶器の段皿である。段部分から欠損しているため、おおよそ10世紀後葉のものであろう。

3　鎌倉・室町時代

1）SD３出土遺物（５・６）

土師器甕・陶器椀（山茶椀）が出土している。５



第11図　出土遺物実測図（１）

は、口縁端部が内側にやや折り込まれる。体部は、全体的に団子形に近い。6は、藤澤良祐氏の編年によれば渥美・湖西型第5型式であろう。時期は、13世紀前葉のものであろう。

2）SD60出土遺物（7・8）

陶器椀・土錘が出土している。7は、渥美・湖西型第5型式であろう。時期は、13世紀前葉のものであろう。

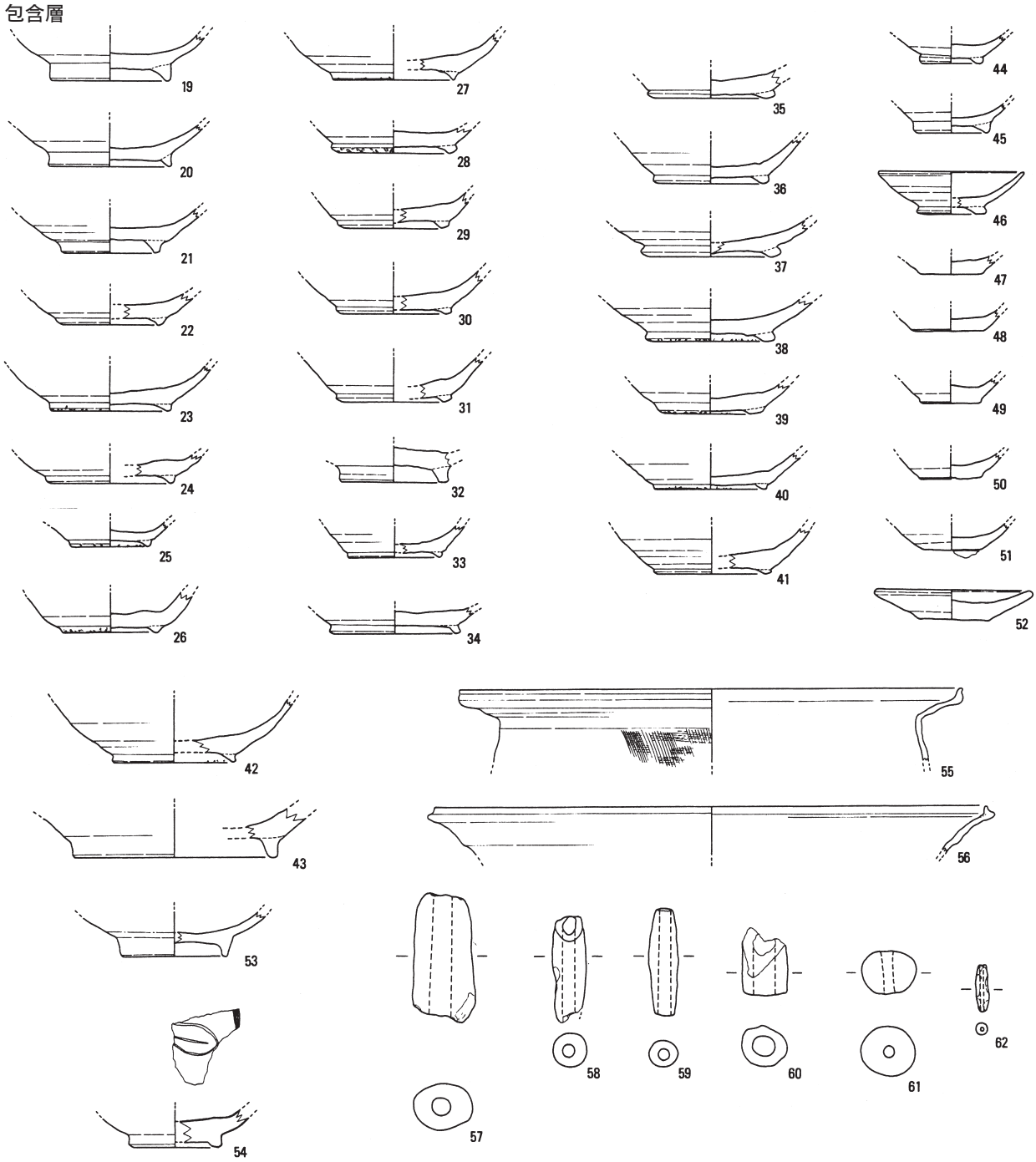
3）SD 2 出土遺物（9）

陶器椀が出土している。内面には、炭化物が付着し黒色である。陶器椀は、渥美・湖西型第5型式であろう。時期は、13世紀前葉のものであろう。

4）SD31出土遺物（10）

陶器椀が出土している。10は、渥美・湖西型第6型式であろう。時期は、13世紀前葉のものであろう。

5）SK 7 出土遺物（11）



第12図　出土遺物実測図（2）

土師器皿が出土している。指頭圧の痕跡が強く残る。時期は、12世紀代とみられる。

6）SK 9 出土遺物（12）

土師器皿が出土している。口縁部はヨコナデによって調整され、外面に指頭圧の痕跡が強く残る。時期は、12世紀代のものであろう。

7）SK21出土遺物（13）

陶器椀が出土している。13は、尾張型第 6 型式であろう。時期は、13世紀前葉に相当する。

8）SK49出土遺物（14）

陶器椀が出土している。14は、尾張型第 6 型式であろう。時期は、13世紀前葉に相当する。

9）SK82出土遺物（15）

陶器椀が出土している。15は、尾張型第 5 型式であろう。時期は、13世紀前葉に相当する。

10）SD67出土遺物（16・17）

陶器椀・白磁椀が出土している。16は、渥美・湖西型第 5 型式であろう。17は、博多分類Ⅴ類に相当する。時期は、おおよそ12世紀後葉から13世紀前葉に相当する。

11）SD 4 出土遺物（18）

18は、土師器羽釜である。口縁端部は斜め外方に引き出される。体部内面は上半をハケ、下半をケズリ、外面はハケによって調整される。口縁部と鍔部は、ナデである。中北勢地域において出土する場合が圧倒的に多く、雲出川以南において出土する例は少ない。よって当遺跡から出土したこと自体に意味があろう。遺物の時期は、おおよそ16世紀前葉に位置しよう。

12）包含層出土遺物（19～62）

青磁椀・白磁椀・陶器椀・皿・南伊勢系土師器鍋・土錘が出土している。53は、白磁椀の高台部である。胎土はやや粗雑であり、全体的に質の悪いものである。54は、青磁椀で博多分類の第Ⅴ類に相当する。見込みに草花文がある。時期は、12世紀後葉に相当しよう。55・56は、南伊勢系土師器鍋は、第 4 段階Ｃ型式とみられる。陶器椀（19～52）は、尾張及び渥美によって占められており、第 4 型式から第 6 型式に相当しよう。包含層出土遺物の時期は、おおよそ12世紀中葉から13世紀中葉、15世紀後葉から16世紀前葉にかけてのものである。　　（萩原義彦）

［註］

①鈴木克彦・伊藤裕偉・伊勢野久好・岩中淳之「伊勢・志摩」（『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』第 7 回東海埋蔵文化財研究会　1990年）

②山本雅靖「三重県」（近藤義郎編『日本土器製塩研究』1994年）

③齋藤孝正「東海地方の施釉陶器生産」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東　施釉陶器－』古代の土器研究会 1994年）
尾野善裕「東濃窯灰釉陶器編年小考」（『岐阜史学』第96号 岐阜史学会　1999年）

④藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第 3 号　三重県埋蔵文化財センター　1994年）

⑤山本信夫「土器の分類」（『大宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市教育委員会　1983年）

⑥倉田直純「下川遺跡」（『伊勢寺遺跡・下川遺跡ほか』　三重県埋蔵文化財センター　1990年）

⑦伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1　三重歴史文化研究会　1990年）

遺物については、各氏から御助言、教示を頂いた。しかし、書ききれていない部分は筆者の責である。

［遺物観察表註］

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下の規則によって作成した。

1　観察表左端の番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号を付していない。したがってこの番号が遺物の全てでない。

2　実測番号は、実測を行った際の番号である。出だしの 3 桁は用紙の番号で、後側の 2 桁は用紙内での実測した順序の番号である。

3　出土遺構は上段に地区番号を表し、下段に遺構番号を示している。地区・遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。

4　器種については、判明しているものについて記載した。

5　計測値について記載した口径・器高・その他は、それぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、記載のとおりcmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・重・高台径・底径・つまみ径などを表すこともある。

6　調整技法の特徴については、あくまでも成されている調整について記述しており調整順序によるものでない。

7　胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。

8　焼成については、良・並・不良の 3 段階に分けて、その中間に位置する場合はややを付記している。

9　色調については、『新版　標準土色帖』（小山・竹原編19版　1997年）に基づいて表記した。

10　残存については、遺物の残りの割合で表記している。「－」は、表しきれないものである。

11　備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載しているか、遺物取り上げの際の番号などを表記している。

番号	登録番号	器　種	出土遺構	計測値（cm）			調整・技法の特徴	胎　土	焼成	色　調	残 存	備　考
				口径	器高	その他						
1	004-02	弥生土器 壺	F 3 P13	—	残高 2.3	—	内面：ハケ、ナデ 外面：ナデ、ハケ	粗（～3.0㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色 10Y R6/3,7/3	残部僅少	
2	005-07	弥生土器 壺	D 3 SD 4	—	残高 1.6	底径 5.8	内面：底部ハケ 外面：ケズリ、ハケ、オサエ	粗（～3.0㎜の砂粒を含む）	並	内：にぶい赤褐色　5Y R5/4hi 外：橙色　5Y R6/6	—	
3	002-06	製塩土器	E 5 包含層	11	3.9	底径 12.0	内面：ナデ 外面：ナデ	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	赤色　にぶい赤褐色 10Y R5/6　2.5Y R5/4	約20%	かなり被熱著しい
4	003-03	灰釉陶器 段皿	E 7 包含層	—	—	—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	密	良	灰白色　2.5Y 8/1	—	
5	004-01	土師器 甕	C 10 SD 3	21	残高 14.0	—	内面：ナデ、ハケ、ヨコナデ 外面：ヨコナデ、ユビオサエ、ケズリ	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい褐色　淡赤橙色 にぶい黄橙色　にぶい黄褐色 7.5Y R6/3,5/3　2.5Y R7/4 10Y R6/3　10Y R5/3,4/3	約40%	
6	005-02	陶器椀 (山茶椀)	B 10 SD 3	16	5.6	高台径 7.4	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 7/1,8/1	約50%	
7	006-03	陶器椀 (山茶椀)	F 24 SD60	—	残高 2.3	高台径 8.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　N7/0	約10%	
8	008-05	土　錘	SD60	長さ 6.1	幅 1.6	重さ 29.5g	—	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色　浅黄色 10Y R7/3　2.5Y 7/3	完形	
9	005-01	陶器椀 (山茶椀)	B 9 SD 2	—	残高 4.9	—	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　N7/0	約30%	
10	007-06	陶器椀 (山茶椀)	D21 SD31	—	残高 2.2	高台径 7.3	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
11	002-03	土師器 皿	B 6 SK 7	7.4	残高 1.2	—	内面：ナデ 外面：ユビオサエ	密	並	灰白色　10Y R8/2	約30%	歪み著しい
12	002-04	土師器 杯	C 9 SK 9	12.8	残高 2.0	—	内面：ヨコナデ 外面：ナデ、ユビオサエ	密	並	灰白色　10Y R8/2	残部僅少	
13	002-02	陶器椀 (山茶椀)	D11 SK21	—	残高 1.4	高台径 5.8	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～0.7㎜の微砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約20%	内面・断面黒く煤ける
14	006-05	陶器椀 (山茶椀)	H20 SK49	—	残高 2.3	高台径 7.5	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや粗（～2.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　N8/0	約10%	
15	007-09	陶器椀 (山茶椀)	F 22 SK82	—	残高 1.0	高台径 5.2	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
16	006-02	陶器椀 (山茶椀)	E 22 SD67	—	残高 2.9	高台径 8.7	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
17	006-01	白磁　椀	E 22 SD67	—	残高 5.8	—	—	密	良好	灰白色　5Y 7/1	約10%	釉：灰白色 7.5Y 7/1
18	002-01	中北勢系 土師器 羽釜	D 2 SD 4	24.5	残高 9.3	—	内面：体部下半ケズリ、口縁部から体部上半ハケ・ナデ 外面：体部ハケ、口縁部ナデ	密（～0.8㎜の微砂粒を含む）	並	にぶい橙色　7.5Y R6/4	約10%	中北勢系土師器
19	006-08	陶器椀 (山茶椀)	H22 包含層	—	残高 2.7	高台径	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 8/1	約20%	
20	001-04	陶器椀 (山茶椀)	E 3 包含層	—	残高 2.3	高台径 8.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.3㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約20%	内面研磨・内面黒く煤ける
21	006-04	陶器椀 (山茶椀)	I 26 包含層	—	残高 2.3	高台径 6.3	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 7/1	約10%	
22	008-02	陶器椀 (山茶椀)	E19 包含層	—	残高 1.7	高台径 6.7	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約20%	内面研磨
23	004-06	陶器椀 (山茶椀)	C 8 包含層	—	残高 2.6	高台径 7.8	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　7.5Y 7/1	約40%	
24	004-05	陶器椀 (山茶椀)	C 8 包含層	—	残高 1.7	高台径 8.1	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 7/1	約30%	
25	001-08	陶器椀 (山茶椀)	B 7 包含層	—	残高 1.3	高台径 5.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや粗（～0.8㎜の微砂粒を含む）	並	灰白色　2.5Y 7/1	約10%	内面研磨
26	006-07	陶器椀 (山茶椀)	G24 包含層	—	残高 2.3	高台径 6.2	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや粗（～3.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 7/1	約20%	
27	007-03	陶器椀 (山茶椀)	C19 包含層	—	残高 2.5	高台径 7.8	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 8/1	約10%	
28	004-04	陶器椀 (山茶椀)	C 8 包含層	—	残高 1.5	高台径 7.9	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　N7/0	約30%	
29	001-02	陶器椀 (山茶椀)	E 7 包含層	—	残高 1.7	高台径 7.1	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	密	良	灰白色　5Y 7/1	約20%	内面研磨
30	007-08	陶器椀 (山茶椀)	E21 包含層	—	残高 2.2	高台径 7.2	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 6/1	約10%	
31	006-06	陶器椀 (山茶椀)	G23 包含層	—	残高 2.6	高台径 7.3	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
32	005-08	土師質椀	E 2 包含層	—	残高 2.2	高台径 6.9	内面：ロクロナデ 外面：高台部貼り付け後ナデ	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	並	にぶい黄橙色　10Y R7/2	—	
33	001-07	陶器椀 (山茶椀)	B 7 包含層	—	残高 2.0	高台径 6.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや粗（～1.5㎜の微砂粒を含む）	良	灰白色　N8/0	約20%	内面研磨
34	007-04	陶器椀 (山茶椀)	D16 包含層	—	残高 1.2	高台径 8.3	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
35	008-04	陶器椀 (山茶椀)	G24 包含層	—	残高 1.7	高台径 8.0	内面：ロクロナデ、一定方向ナデ 外面：高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　7.5Y 7/1	約10%	
36	005-04	陶器椀 (山茶椀)	C12 包含層	—	残高 2.7	高台径 7.3	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 7/1	約20%	
37	004-03	陶器椀 (山茶椀)	C10 包含層	—	残高 1.7	高台径 8.9	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　7.5Y 7/1	約30%	
38	001-01	陶器椀 (山茶椀)	B 9 包含層	—	残高 2.5	高台径 8.2	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	密	良	灰白色　5Y 7/1	約20%	内面研磨
39	007-07	陶器椀 (山茶椀)	E17 包含層	—	残高 1.8	高台径 6.6	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～2.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
40	001-05	陶器椀 (山茶椀)	B10 包含層	—	残高 2.0	高台径 7.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	密（～1.7㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　N8/0	約20%	内面研磨
41	008-03	陶器椀 (山茶椀)	F 24 包含層	—	残高 2.7	高台径 7.4	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　7.5Y 7/1	約20%	内面に炭化物付着
42	001-03	陶器椀 (山茶椀)	F 3 包含層	—	残高 3.7	高台径 7.8	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.6㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 7/1	約30%	内面研磨・内面黒く煤ける
43	001-06	陶器鉢	C12 包含層	—	残高 2.5	高台径 13.0	内面：剥離著しく調整不明 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ナデ	やや密（～1.8㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	内面剥離著しい
44	007-01	陶器椀 (山茶椀)	C13 包含層	—	残高 1.7	高台径 4.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～2.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
45	008-01	陶器椀 (山茶椀)	E21 包含層	—	残高 1.9	高台径 4.8	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	内面に自然釉付着
46	007-05	陶器椀 (山茶椀)	D16 包含層	9.2	2.7	高台径 9.4	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　7.5Y 7/1	約40%	
47	001-09	陶器皿 (山皿)	F 3 包含層	—	残高 0.7	底径 4.0	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、底部ナデ	密	良	灰白色　黄灰色 2.5Y 7/1　2.5Y 6/1	残部少	内面自然釉付着、研磨
48	006-09	陶器椀 (山茶椀)	G25 包含層	—	残高 1.3	底径 4.8	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや粗（～4.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約10%	
49	005-06	陶器椀 (山茶椀)	D12 包含層	—	残高 1.3	底径 3.9	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 8/1	約10%	
50	005-03	陶器椀 (山茶椀)	C 8 包含層	—	残高 1.3	底径 4.0	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～1.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　5Y 7/1	約20%	
51	007-02	陶器椀 (山茶椀)	C17 包含層	—	残高 1.5	底径 3.7	内面：ロクロナデ 外面：ﾛｸﾛﾅﾃﾞ、高台部貼り付け後ヨコナデ、底部糸切り痕残る	やや密（～2.5㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　N7/0	約10%	
52	005-09	陶器皿 (山皿)	F 2 包含層	10	1.9	底径 4.6	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、底部糸切り痕後ナデ	密（～1.0㎜の砂粒を含む）	並	灰黄褐色　にぶい黄橙色 10Y R6/3　10Y R6/2,5/2	約40%	
53	005-05	白磁　椀	D 9 包含層	—	残高 2.5	高台径 6.8	内面：不明 外面：高台部削り出し	密（～1.0㎜の砂粒を含む）	良	灰白色　2.5Y 8/2	約10%	釉：淡黄色 2.5Y 8/3
54	002-05	青磁　椀	C 7 包含層	—	残高 1.8	高台径 6.0	内面：草花文 外面：削り出し高台	密（～0.8㎜の微砂粒を含む）	良	オリーブ灰色　5G Y6/1 断面：灰白色　N8/0	約10%	削り出し高台
55	003-01	南伊勢系 土師器　鍋	D 4 包含層	35	残高 3.0	—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ	密	並	灰白色　灰黄褐色　黒色 10Y R8/2　10Y R5/2　7.5Y R2/1 断面：オリーブ黒色　5Y 3/1	約10%	
56	003-02	南伊勢系 土師器　鍋	D 5 包含層	32	残高 4.6	—	内面：ナデ、ロクロナデ 外面：ロクロナデ、ハケ	密	並	灰白色　浅黄橙色 10Y R8/2　10Y R8/3 断面：灰色　5Y 5/1	約10%	
57	003-06	土　錘	D12 包含層	残長 8.2	幅 3.7	重さ 100.88g	—	やや密	並	浅黄橙色　7.5Y R8/4	ほぼ完形	
58	003-07	土　錘	B 7 包含層	残長 6.6	幅 2.1	重さ 24.515g	—	やや密（～0.5㎜の微砂粒を含む）	並	黄灰色　2.5Y 4/1	約80%	
59	003-08	土　錘	B10 包含層	残長 6.7	幅 1.8	重さ 18.345g	—	密	良	褐灰色　10Y R5/1	完形	
60	003-04	土　錘	C 4 包含層	残長 4.3	幅 2.6～2.9	重さ 21.1g	—	やや密	並	灰白色　10Y R8/2	約20%	
61	003-05	土　錘	C10 包含層	長さ 2.8	幅 3.5	重さ 30.145g	—	やや粗（～6㎜の小石を含む）	並	褐灰色　黄灰色 10Y R4/1　2.5Y 6/1	完形	
62	005-10	土　錘	C11 包含層	残長 3.0	幅 0.9	重さ 1.57g	—	密（～1.0㎜の砂粒を含む）	並	橙色　2.5Y R6/6	完形	

第３表　出土遺物観察表

Ⅴ　ま　と　め

今回の調査によって、若干の成果をえることができた。調査そのものには、周辺に所在する遺跡からそれなりに大きな成果が期待された。しかし、遺物の量は調査面積に比べてやや少ない。遺構は、時期不明なものが多い。調査の成果を踏まえて今後の課題を考えたい。

1　弥生時代について

遺物は、僅かながら出土し弥生時代中期において集落を含めた何らかの生活圏を形成していたことが窺える。かつて調査された弥生時代前期の中ノ庄遺跡[①]から中期前葉にかけて生活域の拡散と考えられる。また、低地の微高地に所在していた弥生時代前期の集落がさらに低地に移動した結果よるものと考えられるのではなかろうか。これらの現象は伊勢平野において普遍的な現象で斉一性もつとみられ、弥生時代中期から後期にかけてのこの地域の遺跡の解明が望ましいのではなかろうか。

2　中北勢系土師器羽釜について

SD 4 から 1 点だけ出土している。SD 4 は、時期を決めがたく共伴遺物もないため不明なことが多いのが残念である。遺物の時期は、16世紀初頭とみられる。この遺物は、雲出川以南において出土することは少なく、津市川北城跡[②]・安濃津遺跡群[③]及び芸濃町大石遺跡[④]・下川遺跡[⑤]・鈴鹿市西条遺跡[⑥]など雲出川以北の遺跡を中心においてみられるものである。そのため、田面遺跡は以南の各処の遺跡と異なる様相を示す可能性を持っている。また、松本権現前遺跡[⑦]においても中北勢系土師器羽釜とみられるものが出土しており、当遺跡と有機的な繋がりをもち、その他方で雲出川以北の遺跡と何らかの繋がりを示しているであろう。また、この土器が僅かであろうが雲出川以南において流通した主因は、どこにあるのであろうか。

［註］

①谷本鋭ニ『中ノ庄遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会 1972年）

②萱室康光ほか『川北城跡発掘調査概報』第 1 次調査（津市教育委員会　1981年）

③伊藤裕偉「安濃津に関する基礎検討」（『安濃津』三重県埋蔵文化財センター　1997年）

④森川幸雄「大石遺跡」（『平成 3 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第 1 分冊　三重県埋蔵文化財センター 1991年）

⑤倉田直純「下川遺跡」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990年）

⑥服部芳人「西条遺跡」（『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第 1 分冊　三重県埋蔵文化財センター 1990年）

⑦村田匡『松本権現前遺跡発掘調査報告』（三雲町教育委員会 1999年）

村田匡『松本権現前遺跡第 2 次発掘調査報告』（三雲町教育委員会　2002年）

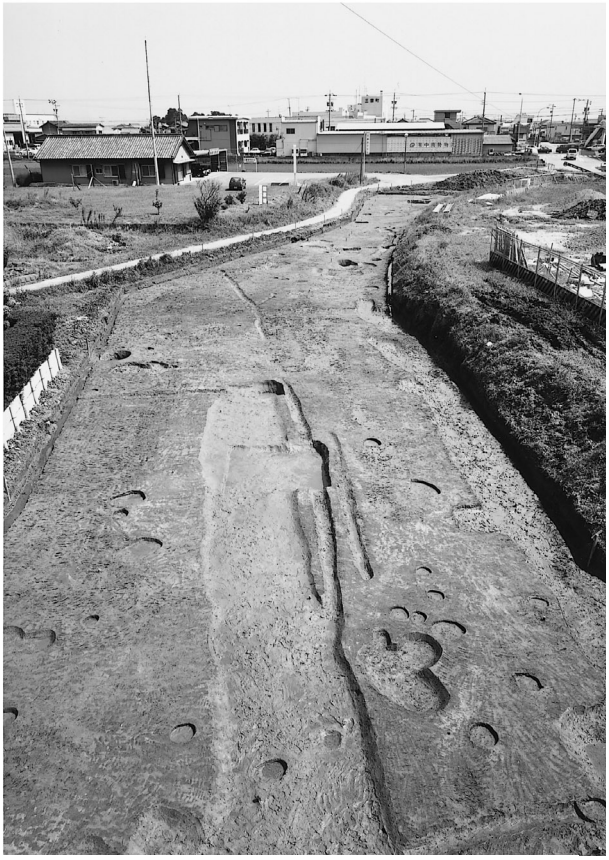
その他以下の文献を参考にした。

伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜第 1 次調査』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）

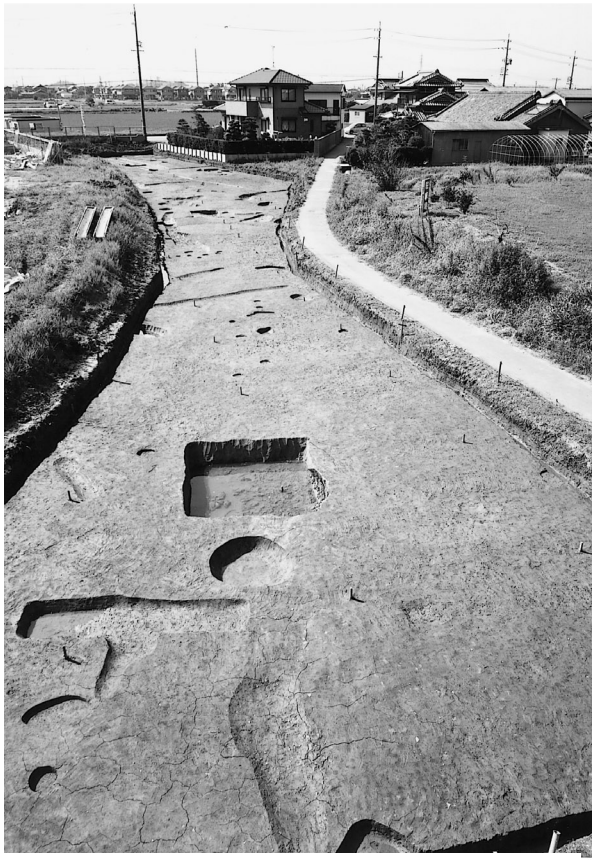
伊藤裕偉『嶋抜Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター　2000年）

伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜Ⅲ』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第四回東海考古学フォーラム　1996年）



調査区完掘状況（西から）



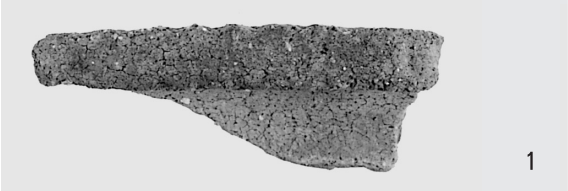
調査区完掘状況（東から）

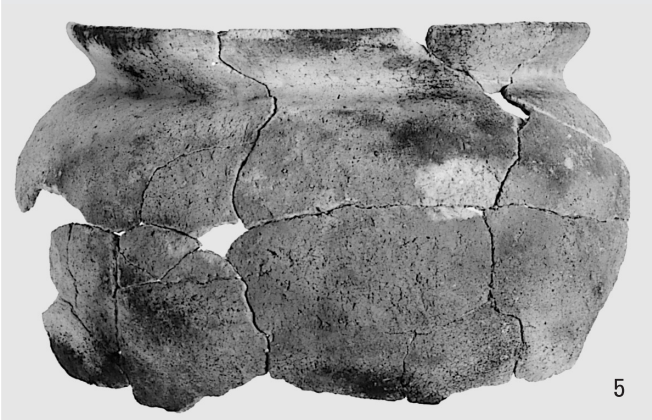
SD 3 遺物出土状況

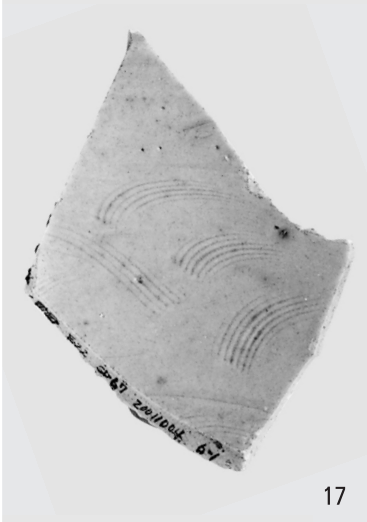
PL 2

調査区完掘状況（北から）

調査区完掘状況（西から）

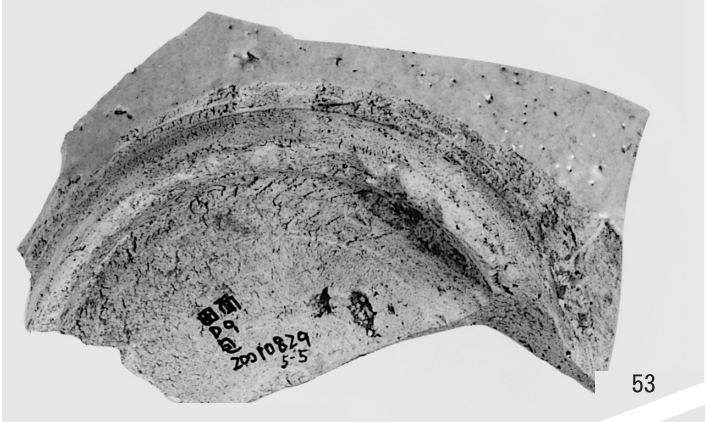


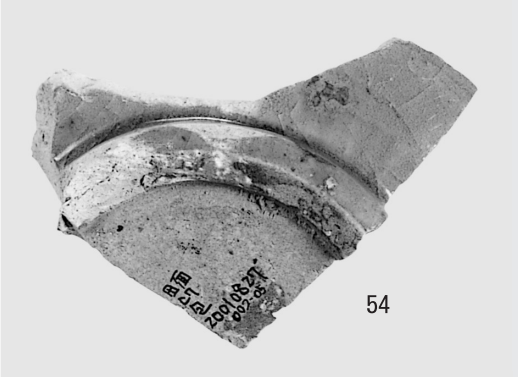


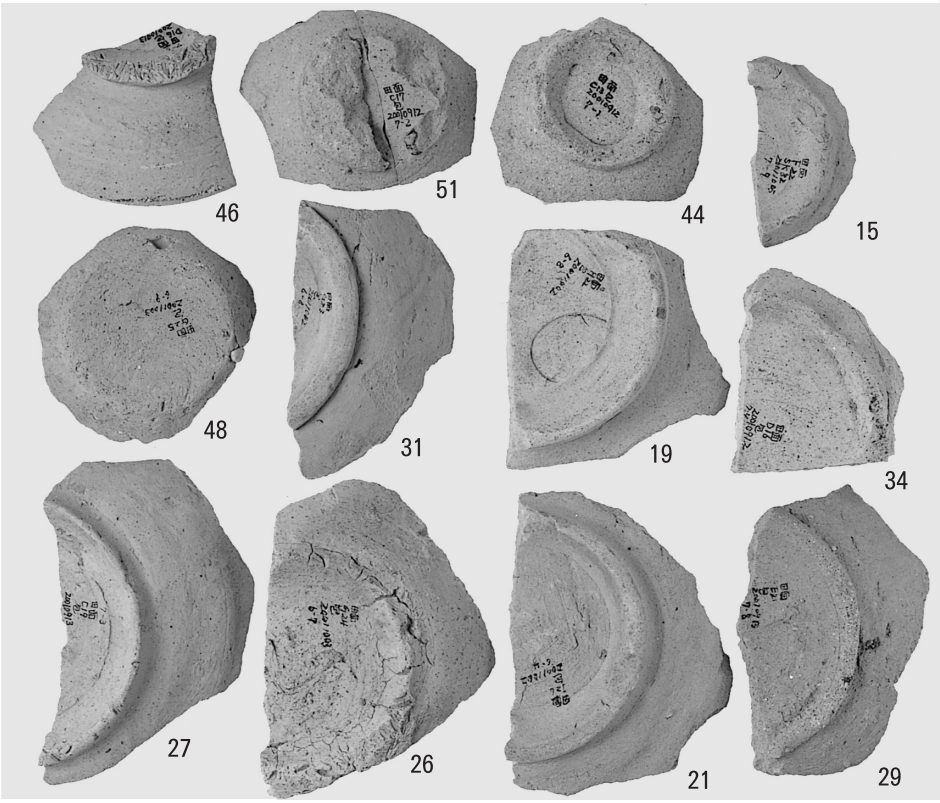


出土遺物

PL 4







出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	たもていせきはっくつちょうさほうこく
書名	田面遺跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	241
編著者名	萩原　義彦・山﨑　博史
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596-52-1732
発行年月日	西暦2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たもていせき 田面遺跡	みえけんいちしぐんみくもちょうそはら 三重県一志郡三雲町曽原	24407		34°37′31″	136°31′06″	20010820 ～ 20011019	1,250㎡	平成13年度広域農整備事業（中勢３期地区三雲Ⅰ区）
				34°37′42″	136°30′55″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田面遺跡	集落跡	鎌倉・室町時代	塀・土坑・溝・井戸	南伊勢系土師器鍋・土師器甕・皿・陶器椀（山茶椀）・青磁椀・白磁椀	

三重県埋蔵文化財調査報告241

田面遺跡発掘調査報告

～一志郡三雲町曽原所在～

２００３年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　　刷　伊藤印刷株式会社